

曲想と音楽の構造との関わりに着目した言語活動とその分析 —ヴィヴァルディ《春》の鑑賞授業において—

Language Activities and their Analysis Focusing on the Relationship between Mood and the Structure of Music
: Through Appreciation of Vivadi's "Spring"

後藤 友香理 (静岡大学)

GOTO, Yukari (Shizuoka University)

(キーワード)

音楽の構造、音楽を形づくる要素、鑑賞授業、言語活動、質的分析

1.はじめに

鑑賞の授業でしばしば耳にするのが、鑑賞文に関する悩みである。「感じ取ったことをどのような言葉で表現すれば良いのかが、分からない」¹生徒たちがいる一方で、ただ文章を書き連ね、本当に音楽のよさや美しさを味わって聴いていたのか疑問なケースも散見される。

新学習指導要領(平成29年告示)では、鑑賞活動において「音楽の構造を捉えることが極めて重要」²であると示されており、要素の言葉を支えとした言語活動が頻繁に行われている。にもかかわらず、鑑賞文が書けない生徒や、音楽のよさや美しさを十分に味わえていない生徒がいるのはなぜだろう。その一因として、要素を示す言葉だけが一人歩きし、生徒たちが実感を伴いながらそうした言葉と音楽の実体とを理解するに至っていないことが考えられる。音楽が多く要素同士の複合的な関係性から成り立っていることを理解できてこそ、音楽の構造を捉えることができると思う。

本発表では、中学校の鑑賞授業において①音楽を形づくる要素同士の関わりを意識化し、②鑑賞活動が苦手な生徒でも、グループ活動の中で実感を伴いながら音楽を表現する言葉を獲

得できることを目的とした授業の報告を行う。その上で、生徒たちの言語活動を質的に分析し、こうした学習活動の効果を検討する。

2. 授業について

授業は、静岡大学附属島田中学校の1年生(36名)を対象に行われ(授業者は同中学校教諭)、ヴィヴァルディ作曲《春》より第1楽章を題材に、4回構成の授業で行われた。先述した目的を達成するための手立てとして、鑑賞チェックシート、ワークシート、付箋による活動、批評文などの言語活動を置いた。ここでは、ワークシートと付箋による活動の説明を行う。

ワークシートでは「表現されていること」と「そう感じた理由」の2点を必ず結び付けて記入するようにした。また、他者の意見で共感したことや新たに発見したことを、色を変えて記入できるようにし、思考・判断の過程を記録に残し、表現する言葉が増えていくことを実感できるようなワークシートになるよう留意した。

付箋による活動とは、「情景」と「要素」を2色の付箋で区別し、それらの関係性を線で結び視覚化する作業のことである。生徒たちは思考を整理し、複数の要素が関わりあつて情景を生み出していることを意識できた。また、互い

¹千葉葉子ほか(2010)「楽しい鑑賞の授業をめざして」『川崎市総合教育センター研究紀要』第23号、p.63

²文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』教育芸術社、p.29

の付箋をまとめ、線で結んでいく活動を通して、他者の言語資源を獲得し、自分では気づいていなかった要素同士の関わりを意識するきっかけになったと考えられる。

3. 分析

このような活動が音楽の言語化にどのような影響を及ぼしたのかを考察するため、生徒の記述を分析した。その結果を抜粋して掲載する。

まず題材の前後に行われた鑑賞チェックシートを解析し、全体的な傾向を探った。音楽を形づくっている要素の言葉で生徒たちの記述をコーディングした。その結果、以下の2点の傾向が見られた。①項目数は1回目は416、2回目は658となり、生徒たちはより多くの要素を関連させて音楽をイメージできるようになった。②1回目では「音の高低」「強弱」「速度」など知覚しやすい要素に記述が集中していたが、2回目では「音色」「テクスチュア」が増え、より高次の要素に着目できるようになった。

次に、何らかの課題を抱える生徒をピックアップして、ワークシート、付箋による活動などを含めたより詳細な分析を行った。ここでは、音楽の言語化そのものに課題を抱え、記述することが困難な生徒(以後生徒A)の例を挙げる。

生徒Aのワークシートには当初空欄が目立っていた。しかし、学習が進むにつれ他者の意見が書き込まれ、学習の終わりでは、メンバーの言葉を借りつつも音楽の実状に合わせて自分の言葉で言い換えようとしている様子が見えがえる(表1)。グループ内の議論を聞きながら、生徒Aは音楽の聴き方や言語化の仕方にヒントを得て、自信を得たのだと考えられる。

4. まとめと課題

生徒たちは要素同士の複合的な関わりを意識化することで、より曲想と音楽の構造との関わりを実感できるようになったと考えられる。

また、鑑賞活動が苦手な生徒でも他者の影響を受け、言語資源を豊かにしていく過程が確認できた。しかし、何度も生徒たちに言語化を促す中で、全てを言語化すべきという観念を生徒たちに与えていなかったか、個性豊かな感性を枠に押し込めることになっていなかったか、反省の余地もある。生徒たちの記述には常に、要素の言葉に還元できない感性が含まれており、それこそ一人一人の個性に基づいた、実感を伴った感受である可能性が高い。生徒たちの鑑賞文の質が均一になっていくことを私たちはプラスの効果として認識しがちであるが、それが自由な感性を否定し、画一化していくことになっていないか自問していく必要がある。

1回目	2回目
記述なし	たくさんの鳥が楽しそうに歌っているということが、一人のヴァイオリンじゃなくて、たくさんのヴァイオリンで演奏されているところから感じられた。

表1 ソネットEの記述の変化

主要参考文献

- 後藤友香理、横山知代(2020)「要素同士の関連に着目した鑑賞活動の実証的研究—ヴィヴァルディ《春》を題材として—」、『静岡大学教育実践総合センター紀要』第30巻 pp.115-123
- 千葉葉子ほか(2010)「楽しい鑑賞の授業をめざして」『川崎市総合教育センター研究紀要』第23号 pp.61-76
<http://www.keins.city.kawasaki.jp/kenkyu/kiyou/kiyou23/23-061-076.pdf> (2020年12月20日)
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』教育芸術社

付記

本研究は後藤、横山知代(2020)を元にして、新たな知見を加え再構成したものである。なお、本研究の一部はJSPS 科研費 19K20770 の助成を受けている。